

File 6 ▶▶ 木山啓子

〈国際協力NGO「JEN」事務局長〉

「間違っているでもいいから、
大きな声で速くしゃべる」

世界の紛争地域や災害現場で国際援助活動をしてきた木山さん。
スピーディーで円滑なコミュニケーションをとるために必要な英語力とは。

木山式！ 英語勉強法のコツ

- 1 英文和訳で文法の基礎固め
- 2 英語のシャワーを浴びる
- 3 気になる表現を「速喋」^{そくちやう}する

二

ニューヨークに留学したのは28歳のときでした。それまでメーカーで貿易の仕事をしていたので、自分では英語が得意なつもりでした。でも行ってみると、あまりにも通じなくて愕然としたんです。ハンバーガーを注文するのに何度言っても通じなかった(笑)。

2年半留学して、英語にはだいぶ慣れました。いまではさすがに英語で論文を書くことはなくなりましたが、JENには日本語を話せないスタッフもいるので、公用語は日本語と英語。ミーティングを英語でする機会も頻繁にありますし、一斉メールは日本語と英語の両方で書きます。

私自身の経験で言うと、英語力が大きく伸びたと実感できたときが3回ありました。1回目は大学受験の勉強で、英語の教科書2冊を丸ごと

訳すという宿題をやったんです。夏休みをかけて2冊全部を訳しきったら、なんだか急に英語がわかるようになった感覚がありました。その後留学準備でTOEFLやGRE(大学院共通試験)の勉強をしたときにも、そのときの英文和訳で覚えた文法の下地が役立った。英文和訳していきまどき流行らないと思いますけど、やってよかったと感じています。

2回目は、留学したとき。英語のシャワーを浴びるという経験をしたことです。留学でなくてもよいけど、日本語に逃げることを許されない、英語だけの環境に身を置くのはいい経験になると思います。

3回目は、シャドーイングの練習をするようになったこと。私はこれを「速喋」と呼んでいます。自分がマネしたい英語表現を耳で聞きながら、その瞬間にほとんど同じ速度で口ずさんでみるんです。構文も暗記できるし、リズムや抑揚も体にしみこむ。発音することで、たんなる記憶ではなく、筋肉として体に覚えさせるんです。題材はニュースでもスピーチでもいいのですが、カッコいい映画のセリフなどをシビれながら使ったりしています(笑)。

国際協力の現場でよく感じること

ですが、しゃべるのが遅いと会議のテンポが遅くなる。するとまわりが聞いてくれないわけではないけど、自分の存在感が出せない。だから発音は良くなくてもいいから、堂々と、速くしゃべることが重要だと感じています。文法を気にしすぎてゆっくり話すよりは、間違っているでもいいから大きな声で速くしゃべる。その訓練として、「速喋」はぜひお勧めしたい勉強法です。

大勢の前で話すときは緊張します。でも英語の環境では、日本語環境以上に、話さないことのデメリットが大きい。英語は道具だとわりきって、つねに伝えるべき中身を持つようにすることが大切です。会議のときに発言することがなければ、質問をすればいい。これは英語力というよりは、コミュニケーションに対する姿勢のようなものですね。(談)



Profile
Keiko Kiyama

千葉県生まれ。メーカー勤務などを経て、ニューヨーク州立大学で修士号取得。国際協力NGO「JEN(ジェン)」の創設メンバー。旧ユーゴスラビア、アフガニスタン、イラク、スーダンなどで緊急支援活動にあたってきた。

言いたくて言えなかった英語

「検察官が証拠を改ざんしたことを認めた。」

“The prosecutor admitted to tampering with evidence.”

■ 検察官

■ 改ざんする

Other Key Expressions

隠蔽する：cover up
起訴する：indict

不正、悪事：wrongdoing
でっち上げる：make up a story

大阪地検：the Osaka District Public Prosecutors Office
特捜部：special investigation unit